帯広市立愛国小学校　学校だより

あいこく

令和６年１０月１０日（木）発行 No.14 文責 校長 合田　真晃

学校教育目標
豊かな心で協力しあえる子ども
自ら学び創造し深く考える子ども
何ごとにも進んでやりぬく強い子ども

今年度も後半戦　「教わる」から「学ぶ」へ

１学期末の学校だよりにも書きましたが、学校では「VUCA の時代」を生き抜く力を子どもたちに育むための、「授業改革」に向けた取組が進んでいます。先日は今年度２回目の帯広市教育委員会の学校指導訪問が行われましたが、「春に訪問したときと比べて明らかな変化が見られる。子どもたちが自分から動き出す姿が見られたし、いい表情もたくさん見られた。このまま全教職員で実践を積み上げていってほしい。」と、進んでいる方向への一定の評価をいただきました。

では、いったいどのような変化が起こってきているのでしょうか。ある学級の担任は、「今までだったらすぐにそれはこうだよ。こうするといいよ。と教えてしまっていたのを、こちらからはなるべく教えないよう意識をして、子どもたちから考えを引き出すようにしている。」と言っていました。例えるならば、「バスのお客さんとしてただ席に座っているのではなく、自分でバスを運転して目的地へ行かせるようにするようなものだ。」と…。極端な例えかもしれませんが、まさに言い得て妙。予測困難で不確かなこれからの時代を生きていく上では、ただ単にお客さんとして座席に座っているだけでは何とも心許ないため、時には自分が運転手となってバスを運転したり、時には周りの人と協力して何とかしてバスを目的地までたどり着かせたりといったことを、一人一人の子どもたちが授業の中で数多く経験することができるような学び方に変化をしてきているのです。

しかし、これまでと違う取組を進めていくことには、どうしても不安もつきまといます。そのため、客観的な判断材料としてのエビデンスを学校では大切にしながら取組を進めています。その中の一つに、先日行われた「学校評価アンケート」がありますが、みなさんはお気づきになりましたでしょうか。右の表は子どもたちの回答を抜粋したものですが、何と一つの項目以外全ての項目で昨年よりも評価の数値が上がっている（残る一項目も４段階中 3.8 と高評価でした）のです。「学校が楽しい」「進んで学習に取り組んでいる」と、子どもたちが自らを肯定的に捉えながら前向きに進んでくることができていることは、大変よい傾向だと考えています。今後も、子どもたちの更なる意欲を引き出しながら、教師から「教わる」授業から自ら「学ぶ」授業への転換を図っていきたいと思います。

評　価　項　目	児童
わたしは、学校で勉強したことがよくわかる。	3.8
先生たちは、わたしの話をきいてくれ、わかってくれる。	3.8 (3.6)
学校には、いじめがない。	3.8 (3.7)
わたしは、学校に行くのが楽しい。	3.7 (3.3)
わたしは、すすんで学習に取り組んでいる。	3.5 (3.4)
わたしは、クロームブックや大型テレビなどをつかって学習している。	4.0 (3.7)
わたしは、読み・書き・計算がしっかりできる。	3.4 (3.2)
わたしは、明るく素直に生活している。	3.5 (3.4)
わたしは、心のこもったあいさつや返事をしている。	3.7 (3.5)
わたしは、家や学校のきまりや約束を守っている。	3.7 (3.6)
わたしは、周りの人に思いやりの気持ちをもって接し、仲良くしようとしている。	3.9 (3.5)
わたしは、ねばりづよく最後までやりぬくことができる。	3.5 (3.4)
わたしは、どの学年の友だちとも、協力して活動することができる。	3.8 (3.7)
わたしは、安全な行動をするように気をつけている。	3.9 (3.6)
わたしは、「早ね・早おき・朝ごはん」を心がけ、体力づくりに頑張っている。	3.7 (3.5)

自らの命を守る

９月 27 日に、帯広警察署の方を講師に防犯教室を行いました。不審者から身を守るための合言葉である「いか・の・お・す・し」を中心とした学習でしたが、どの子もしっかりと話を聞き、実際を想定した訓練もしっかりとこなすことができました。学んだことを発揮する機会が来ないことを願うばかりですが、信じられないような事件や事故があちこちで起こっています。もしもの時にしっかりと自分の身を守ることができる判断力を、日頃から意識をして身に付けさせたいものです。日暮れも早くなり、１０月からは帰宅時刻が 16 時までとなっています。ご家庭でも、あらためて放課後の過ごし方について子どもたちと確認をお願いいたします。

子どもたちの可能性は無限大

「子どもたちは無限の可能性をもっている」とはよく言われる言葉ですが、みなさんはこのことをどのように感じているでしょうか。考え方は人それぞれですので、どれが正解といったことはありませんが、学校は基本的にはこの考え方に基づいて子どもたちに接し、教育活動を行っています。一方で、この１５年ほどの間に、「みんな頑張っているんだから頑張れって言わない方がいい」という考え方が、一般的に広く浸透してきたりもしています。

ここで考えなくてはならないのは、「可能性があるんだから頑張った方がいい」のか、「頑張っているんだから無理をしない方がいい」のかといった点ですが、これもどちらかが正解でどちらかが間違っているということではきっとないのです。ただ、大切になってくるのは、子どもたちはまだ子どもですので、我々大人が上手くその可能性を伸ばすサポートをしてあげるということではないでしょうか。

☆　☆　☆

私が小学校５年生の時のマラソン大会の話になります…。

マラソン大会に向けた練習では、私は常に 10 位前後の順位でした。そして、１位と２位はいつも学年のみんなが一目置いているＡくんとＢくんが独占していました。１位と２位がいつも同じ二人なのは学年全員が当然だと思っていましたし、私は 10 位前後が自分の力だと思っていました。なので、大会前に仲のよい友達と「一緒に走ろうね」と約束をしたりもしていました。そして大会当日…。全行程の半分ぐらいまで走ったところで、なぜだかわからないのですが、突然“もう少し行ってみよう”という気もちになったのです。一緒に走っていた友達にはごめんなさいでしたが、前を見ると９位の子が見え、何とその子を追い抜くことができたのです。すると８位の子が見えて…、という感じで走り続けていると、グラウンドに戻ってきたときには何と３位のポジションを走っていました。前に見えるのはあこがれであり、絶対にかなうはずもないと思っていたＡくんとＢくんの二人だけ。もう無我夢中で最後のグラウンド１周を走り切り、何とゴール直前で一人かわして２位でゴールとなったのです。

このことは私にとって大きな気付きを生みました。もしかしたら、「やればできるのか？」と…。

☆　☆　☆

子どもたちが自分のもつ可能性に自分で気付くことは実は容易なことではありません。だからこそいろいろな経験を積む中で、「できた！」「うまくいった！」というポジティブな感情をたくさん味わうことができるようにサポートしていくことが大切なのです。ポイントは、

①「子どもだから無理」「うちの子にはできない」と、大人が判断してしまわないこと

子どもの可能性に「ふたをする」「制限をかける」ということがないようにし、「どうやったらできるかな？」と問いかけ、子どもの思考力・判断力を養っていくこと。

②いろいろな経験をさせること

私にとっては、上の経験ができたことは大変幸せな偶然でしたが、この偶然に出会う確率を上げるために、いろいろな経験をさせたいのです。何も大げさな経験でなくともよいのです。我々大人は経験上、子どもたちがその経験をすることで“偶然気付く”のではなく、“気付いて当然”だということをたくさん知っているのではないでしょうか。子どもたちが自ら「やったらできた」「やってよかった」「次もやってみよう」と思えるような経験をたくさん積ませてあげたいです。

③子どもの可能性を信じること

子どものことを信じることって実は難しいことかもしれません。しかし、それができていれば子どもはそのことを敏感に感じ取り、安心して前に進んでいくことができます。

☆　☆　☆

話を戻すと…、　学校では「頑張れ！」とただ言うのではなく、「やってみたいな」「できそうかも」という感情を子どもたちの中から引き出す関わりを大切にしています。その中で、「やってみてよかった」「次はこんなことをしてみたい！」というプラスのエネルギー（これが学校で言うところの“自己肯定感”とか“自己有用感”というものです）を生み出せるようにし、その子が自己実現を果たしていくことができるように導いていくのです。ですので、上記の問いに対する学校の考え方としては、「無責任に頑張れって言うことはしない」ものの、今はまだ知らない可能性に気付かせるために自らやってみようと思う気持ちを引き出し、結果として「“自ら頑張ろうとしている”子どもたちを最大限にサポートする」、ということになります。

子どもたちに伝えている「Chance」とは、いろいろな経験を積んで自分の可能性を広げ、自分を信じることができるようにしていくことに他なりません。後期の学校生活の中でも意図的にたくさんのチャンスを生み出し、一人でも多くの子がよい経験を味わうことができるようにしていきます。地域・保護者の皆様におかれましても、ぜひ子どもたちを信じ、見守ったり励ましたりといったサポートをしていただければと思います。今後も皆様のお力添えをよろしくお願いいたします。